

環境としての建築

芦澤 竜一

環境建築デザイン学科

1. はじめに

私は、大学卒業後、建築家安藤忠雄の元で6年間勤務した。毎日朝から深夜まで長時間、個人住宅から集合住宅、公園、ホテル、美術館、そして緑化プロジェクトなど多数のプロジェクトに関わり、多くの経験をさせてもらった。その中でも1995年の阪神淡路大震災後に被災地に約30万本の樹木を植えた「ひょうごグリーンネットワーク」の活動を通して、建築家が、建築物だけでなく、自然環境も含めて考え、提案・行動する姿勢から多くを学んだ。退所後2001年に自分の建築設計事務所を開設し、以降2013年4月に滋賀県立大学に着任し、約14年間設計活動を行いながら研究を行ってきた。

2. 建築設計における環境

建築設計とは、通常施主より依頼され、ある場所に施主の予算を用いて、人間活動のための場として建築の設計を行う仕事である。一般的な仕事では、機能性そして経済性をまずは考えることを求められる、環境への影響や環境についての何らかのふるまいを施主側から求められることはほとんど皆無である。例え考慮があったとしてもその優先順位は極めて低い。20世紀において建築は利便性、合理性、経済性を偏重して追求した結果、現在の様な無味乾燥とした均質な都市環境とその代償としての様々な環境問題が生じている。建築設計の中で、環境という要素をいかに人々と共有するか、大変頭が痛い状況であるが、これからの地球と人間が付き合っていくためには、相互に理解をしなければいけない大きなテーマである。

3. ゴミから循環へ

自分自身の設計事務所で設計を行い始め、建築することとはどのような行為かということ日々問い続けてきた。人間のため、社会のため、経済活動のためなど多くの要素を考えながら、ひたすらこれからの建築のあり方を模索していた。しかし20世紀までに築かれた建築が持つ方法論の延長には大きな

突破口は見えない。2006年ぐらいであったらどうか、ひよんなことをきっかけに、大阪駅近郊にある事務所の屋上で、自分やスタッフ達の賄いから生じた生ごみで土をつくりはじめた。そしてその土で、累計40種類ぐらいの野菜を育て、食材として調理し、食べるようになった。屋上空間は、緑に囲まれた心地の良いリラックス空間となり、大都市の中で小さな循環が生まれた。ゴミという概念は自然界にはなく、人間がつくっているものである。先のことを考えず消費活動ばかりを行う現代の都市社会において、多くの人は建築も消費物として考えている。日本の建売住宅の寿命は、平均すると40年ぐらいではなからうか。そして不要となった建築物のほとんどが産業廃棄物と化す。野菜をつくりはじめてからか、そんな現状を打破し、現代の技術によって資源を有効に用いて、地球の一部となる循環する建築をつくりたいと思う様になっていった。

4. 環境としての建築の実践

まだ「環境としての建築」を模索している途中ではあるが、ここでこれまで行ってきたいいくつかの具体的な実施作品（研究）を紹介したい。

一つ目は、「Secret Garden」という群馬県で2009年に設計した住宅である。元々畑であった進行住宅地の敷地のコンテクストを読み込み、平屋の建築の屋上を全て食べれるモモやカキなど多様な種類の果樹で緑化した。住宅地の屋上が第2の地盤となり、家族だけでなく、周辺住民そして鳥達もが楽しんでやってくれる共有の庭となっている。堅いコンクリート造と柔らかい木造の箱体を組み合わせで作り、木造部分は、将来住み手のライフスタイルの変化に合わせて、変更できるつくりとしている。

二つ目は、「水都大阪2009」のイベント会場の竹のパビリオンの計画である。滋賀県大をはじめ多くの学生にも参加して頂き、犬上川で真竹約2500本を間伐して、会場内に学生達がセルフビルドで建設したものである。竹の曲がるという特性を理解しながら設計を行った。52日間という短い期間であったが、多くの人々が集い、イベント開催後には、全ての竹を、きれいに解体し、一部の竹で竹紙をつくっ

た。残りはバイオマス燃料として利用し、通常のイベント会場施設の様なゴミを生じさせない計画とした。

三つ目は、「風の間」という2011年に沖縄の那覇市で設計した住宅である。沖縄の伝統的民家が持つ住宅形式を読み込み、沖縄の特異な自然環境と一体となった住宅をつくらうとした。風の通り道を計画し、床を持ち上げ、床下には池をつくり、風によって室内を自然冷却することを考えた。また建築と一体となった壁面緑化を施し、遮光すると共に開放的な室内のプライバシーを確保している。

最後に紹介するものは、琵琶湖守山のヨットマリーナ内に計画した「セトレマリーナびわ湖」である。2009年からプロジェクトが始まり2013年に完成した。このプロジェクトに関わるまでは、琵琶湖のことは正直よく知らなかった。まずは琵琶湖を知ろうとびわ湖一周をみて周り、それぞれの場所に魅了されながら調査を行った。色々と調べていくうちにびわ湖のエコトーンを再生させながら、その一部として建築をつくれなかと強く思うようになった。そして建築の屋上に降る雨水を貯める内湖をつくり、琵琶湖際には葦やマコモなど地域種の植物を植樹し、建築屋上は全て地域種の草花の種が飛散してきて宿る場として土壌化し、街側には里山育成ゾーンを設定している。建築の内外共には、地域素材である土や木を多用し、それらの技術は、伝統的な技術を備える地元職人と共にホテルのハードな利用に耐えられるよう考慮しながら生み出していった。びわ湖から吹く風、自然光、太陽熱、水、そして周辺の素材、地域の技術や歴史をいかに建築の中でつなげていくか研究し、設計したプロジェクトである。

5. おわりに

人為行為である建築は、環境とは切っても切り離せない存在である。その規模に拘わらず、良くも悪くも建築は社会に何らかのメッセージを放つ。現代社会を批評的に捉え、歴史視点を持ちながら、自然と人間との感性を伴った知的な関係を築けるよう、環境としての建築学を追求していきたい。



「Secret Garden」



「水都大阪 2009」



「風の間」



「セトレマリーナびわ湖」